

【資料紹介】明治40年の『鹿児島県写真帖』

法文学部人文学科 准教授 小林 善仁

1. はじめに

19世紀にヨーロッパで成立した写真の技術は、幕末期には日本へ伝来した（日本写真家協会1971）。安政4（1857）年9月に鹿児島城内で撮影された「島津斉彬銀板写真」は、日本で最初期の人物写真として知られ、鹿児島城（鶴丸城）内の建物の写真も伝わる。このように、鹿児島と写真の歴史は長崎などと並んで古い。

明治初期には、鹿児島城本丸正門の御楼門と御角櫓や集成館の近代的工場群など当時の鹿児島市街地も撮影され、西南戦争に関連した戦地の写真撮影も行われた。こうした場所を写し自然と人文の情報を記録する貴重な資料は「地理写真」（石井1988）とも呼ばれ、地域を研究する際の資料として用いられてきている。

筆者は本センターの「地域マネジメント教育研究事業」のなかで、「近代鹿児島プロジェクト」と題し、旧城下町である近代の鹿児島市街地に関する調査と研究に組み込み、その一環として関連する史資料の掘り起こしと収集を行ってきた。今回紹介する明治40（1907）年に発行された『鹿児島県写真帖』（鹿児島大学法文学部所蔵）も上記の経緯で収集した資料の一つである。

2. 明治40年の『鹿児島県写真帖』

明治40（1907）年、韓国を視察した皇太子の嘉仁親王は、その帰途に九州から中国・四国地方を行啓した。このうち、10月26日から30日にかけて鹿児島県に滞在し、磯の島津忠重公爵邸を旅館として鹿児島県庁、第七高等学校造士館、鹿児島県物産陳列場、城山など鹿児島市内外の各所を視察した。行啓を報じる「鹿児島新聞」同年10月28付に「県庁御成」と題する関連記事が

見られ、鹿児島県からの献上品として県治概要・統計書・管内地図・鹿児島市街図・栄之尾温泉写真（説明書付）などが列挙されるなか、旧跡名勝図に続いて「全寫眞帖一帖」と記されている。



図1. 『鹿児島県写真帖』（表紙）

※鹿児島大学法文学部所蔵。

鹿児島県知事の千頭清臣が皇太子に献上した写真帖（白石2018）の原本は現在も皇室に伝わり、宮内庁書陵部図書寮文庫が所蔵すると共に「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」でデジタル画像が公開されている。他にも、『玉里島津家資料』（鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵）と鹿児島県立図書館にも同じ写真帖が所蔵されている（三木2007）が、これらを比較してみると内容に違いは無いものの、表紙の装丁に違いが見られ、花を配した献上本が最も豪華である。一方、鹿児島県側で確認できている写真帖の装丁は良く似ているが、詳細に観察すると模様の違いが認められて興味深い（図1）。

写真帖の奥付に記される関係者の情報には、著作兼発行者に行啓事務総務部長の三宅源之助（鹿児島県鹿児島市平之町）、撮影囑託として杉本代吉、印刷者として児童新聞社社主の関口栄（東京市神田区末広町10番地）とあり、このうち住所記載の無い撮

影者の杉本は大正3（1914）年に『桜島爆発記念写真帖』を発行した杉本写真館（鹿児島市山下町347番地）の館主と同じである。写真帖の発行に当たり、鹿児島の写真館と東京の新聞社の連携が窺える。

最後に目次を見ると、鹿児島市全景（城山より見たる）から龍郷湾まで写真の点数は60で、神代三山陵や歌枕の地（奈毛木杜）から幕末・維新関連の史跡、景勝地、近代的施設の学校や工場まで、撮影地点は名所旧跡だけに止まらない。

3. 城山からの市街地写真

図2は『鹿児島県写真帖』の1枚目を飾った城山展望台から鹿児島市街地と鹿児島湾と桜島を眺める全景写真である。一目見て明らかなように、現在の鹿児島市民・県民にとっては良く見慣れたもので、国内外から鹿児島を訪れる観光客にとっても旅行ガイドブックをはじめ様々なメディアで目にする定番の風景写真の構図と言える。図2は、その嚆矢の1枚でもある。

天保14（1843）年に成立した『三国名勝図会』など近世の文献に描かれる山側から海を眺める風景の構図は、浄光明寺や多賀山からのものであり、現在と同じく城山からの眺めは掲載されておらず、眺望の場所ではない。何より、近世の城山はその名が示す通り鹿児島城の一部であり、誰でも自由に立ち入れる山でもない。

城山からの眺めは上野彦馬による西南戦争に関連した戦地写真などがあるくらいで一般的ではなく、明治32（1899）年の風景写真集『旅の家土産』（第15肥薩之巻）も浄光明寺からの眺望を掲載している。城山からの桜島までの眺めという定番の風景の成立と普及は、城山の公園化と観光地化と密接に関連する。この点は、紙数の都合から今後の課題として別稿に譲る。



図2.「鹿児島市全景（城山より見たる）」

4. おわりに

本稿の最後に、近代の景観写真と写真帖に関する今後の課題を幾つか記す。まず『鹿児島県写真帖』の分析が必要であり、この点は鹿児島県が作成した同種の写真帖や他府県の写真帖（白石2016・2018、三木2007）との比較・検討により解明されることも多くあるだろう。次に、今回の『鹿児島県写真帖』のデジタルアーカイブ化による画像の公開も望まれる。保存と公開を含む活用の点もまた課題である。

最後に、近代の鹿児島に関する写真などの景観資料の収集と分析も必要である。地元の写真館が撮影した市街地の写真や写真帖などの景観資料は鹿児島県内にもある。

【文献】

- ・白石烈（2016）「明治・大正両時代御手元写真の来歴」宮内庁書陵部紀要67，53～73頁.
- ・白石烈（2018）「宮内省図書寮における明治・大正両時代御手許写真の整理（附目録）」宮内庁書陵部紀要69，57～79頁.
- ・三木理史（2007）『世界を見せた明治の写真帖』，ナカニシヤ出版.
- ・石井實（1988）『地理写真』，古今書院.
- ・日本写真家協会編（1971）『日本写真史 1840-1945』，平凡社.